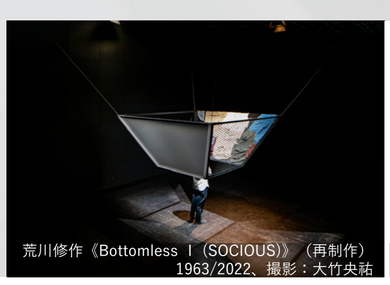
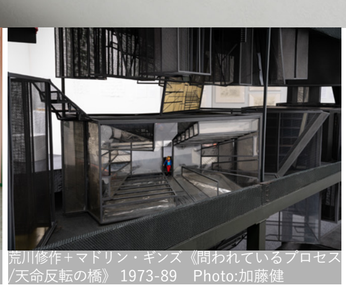
GOOD CONDITION CLINIC　身体の可能性を拡張する臨床装置

デザインのポイント

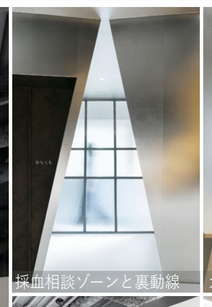
1. 作品《ボトムレス》の思想と接続された底すぼまりの診察室と、カウンセリング等に活きるその「すき間」
2. 多様な知覚特性を持つ人々に安寧をもたらす、インクルーシブデザインの可能性を探る球体空間の配置
3. 身体感覚を揺さぶる山型やアール形状の畳と、ふすまを思わせる軽やかなフレームで囲まれた茶室の構築

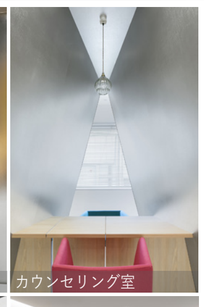

荒川修作《Bottomless I (SOCIOUS)》（再制作）
1963/2022、撮影：大竹央祐


荒川修作＋マドリン・ギンズ《三鷹天命反転住宅
イン メモリー オブ ヘレン・ケラー》2005 Photo:中野正貴


荒川修作＋マドリン・ギンズ《問われているプロセス
/天命反転の橋》 1973-89　Photo:加藤健


待合エリアを囲む診察室の並び


採血相談ゾーンと裏動線


カウンセリング室


銀箔色の壁面


診察室 2

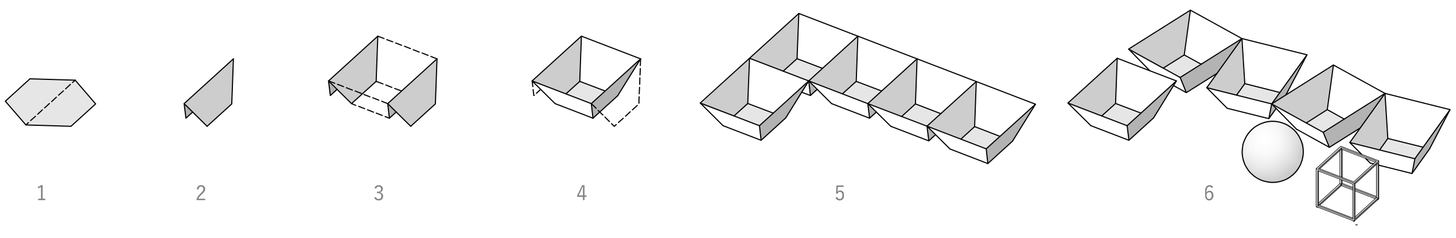
概要 / Summary

美術家・荒川修作＋詩人マドリン・ギンズ（A+G）の思想を臨床空間に適用する試み。初期代表作《ボトムレス》と接続された底すぼまりの診察室群（本体）を構築し、待合には〈天命反転球体〉と〈天命反転茶室〉を配置。日常の知覚を解除し、来院者が新しい〈わたし〉を再組織化する場を創出した。

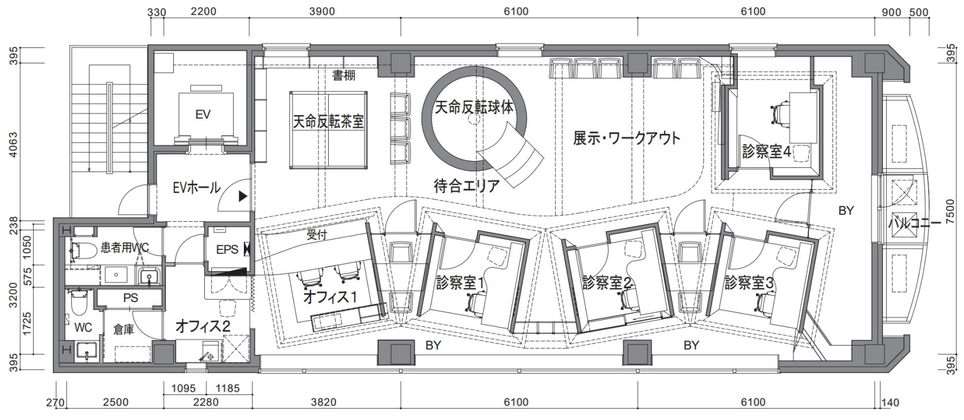
An application of Arakawa + Gins' philosophy to clinical space. Trapezoid examination rooms derived from 'Bottomless' form the core; the Sphere and Tea Room of Reversible Destiny occupy the waiting area. Together they create a place where visitors release habitual perception and reorganize a new 'self'.

全体構成

本計画が目指したのは、安心感や居心地ではなく、身体の可能性を拡張する臨床装置としてのクリニックである。A+Gの思考を接続し、習慣的な知覚の取りまとめを解除・再編成する「体験の場」を構想した。本体（診察室群）は傾斜した銀白色の壁面が虚実を曖昧にし、椅子の足元から全方位へ身体が拡張される感覚と、カウンセリングに活きる「すき間」を生む。本体・球体・茶室が融合するテーマパークとしてのクリニックは、竣工後もワークショップや朗読会など地域に開かれた場として運用されている。



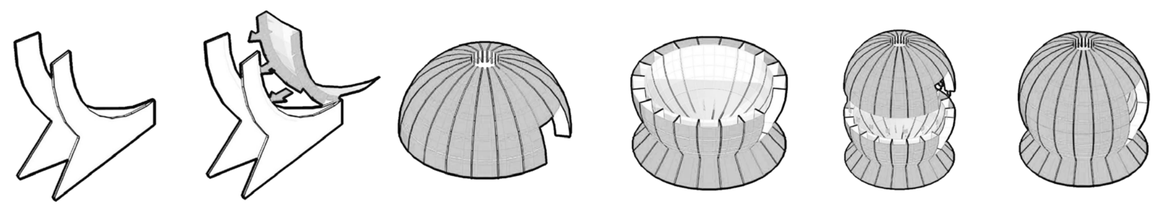
デザインプロセス / 正六角形の山折を起点にボトムレスへと接続された診察室群



平面図

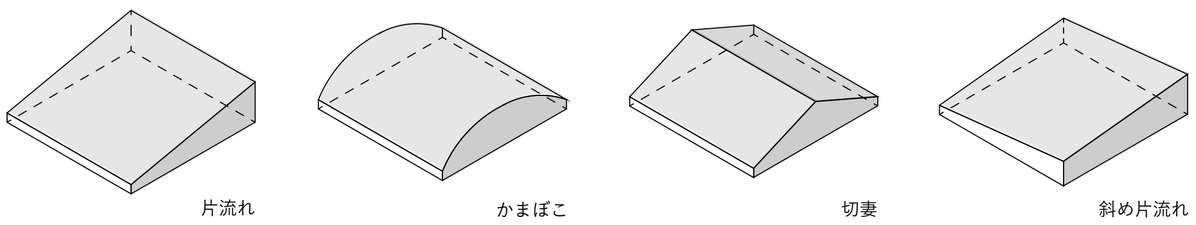
天命反転球体

A+Gの〈三鷹天命反転住宅〉にて自閉症児が球体の部屋に入った途端に落ち着いたというエピソードを起点に、多様な知覚特性に応じるインクルーシブデザインの可能性を探る試みとして直径2.7mの球体空間を制作。内部の鮮やかな黄色の曲面が来院者を包み込み、まだ使われていない身体の可能性を発見し、自ら落ち着く居場所を見出す場となる。

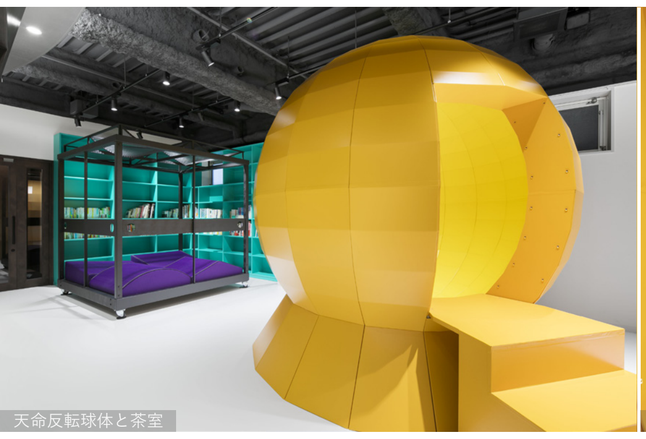

デザインプロセス / 段ボールから生まれる球体

天命反転茶室

A+Gの〈エピナールブリッジにおけるブランクファニチャーのスタディ〉を参照項とし、山型やアール形状の「天命反転畳」で構成された座りにくいフロアと、榛を思わせる軽やかなフレームで囲まれた茶室。身体軸を揺さぶる「新しい意識領域の容器・発生器」として機能し、来院者が自身の輪郭を超えて語り直す場を促す。



天命反転畳


天命反転球体と茶室


包まれる身体


拡張する身体


寝そべる


歩く


天命反転茶室と球体